

「ねえ——」

ページの端まで読み終え、ゴクリと唾を飲み込みながら、手探りでテーブル上のカップに手を伸ばす。

溶けた氷の水をズズズとストローで吸い上げながら次のページに手をかける。真っ白なページが現れると、そこでようやく話が終わったことに気が付いた。

「——ねえってば」

自然と口元が緩む。

どちらかと言えばホラーは苦手な部類に入るだろう。

いいえ——作家の好みはあるにしても、ジャンルで選り好みをするなんて、本好きとしてあってはならない不名誉だ。だからこそこうして読了した時の達成感は何ものにも代え難い。

そのままパタンと文庫本を閉じ、私は誇らかにタイトルに目を落としました。

『あなたの町の怪事件』

口裂け女しかり、狐狗狸こつくりさんしかり。

一昔前に流行った都市伝説や怪奇現象を、いくつか短編として集めた本で、今やつもの思いで読み終えたお話も、そんな数ある都市伝説の一つ。

一冊丸々読み終えるにはこの先もまだまだ恐怖に耐え抜かなければならない。残った目を眺めているだけで軽く目眩が起きそうになる。

作者は……新人女性作家の——海遠みおん花果子かかしと読むのかしら。そでに記載のあつた著者略歴を見る限り、どうやら二年前まではジャーナリストをしていたらしい。

なるほど、この手の都市伝説のネタが豊富なのも頷ける。

これまた私の読書心をくすぐる無名作家の登場に、今後の彼女の作品にも期待ができそうだ。

「メネーリーイー？ ……ハーンさん？」

そう。何を隠そうこの私、マエリベリー・ハーンは古典ミステリー中毒者である。

東野圭吾しかり、有栖川有栖しかり。

古典の巨匠と評される作品は手当たり次第読み漁ってきた。それこそ暇さえあればスキャナーの如く。もはや趣味を超えた体質と言いついていいだろう。

普段なら最寄り駅近くにある古本屋、香霖堂書店に足を運び、仕送りの大半をつぎ込むのが私の日課でもあるのだが、「たまには最近の本も読みなよ」ということで知人から渡されたのがこの本だった。

案山子ではなく花果子と書くのは林檎の仲間である海棠の花にちな因ちなんでのものだろうか。ちなみにだが彼女のシリーズは二巻まで出ているらしく、私が借りたのは第一巻。

これからも彼女の小説とお付き合いを続けるのであれば、もっとタフな心臓を持たねばならないだろう。

とはいえ先ほどの――

「ねえ！ メリーってば!!」

突然。

手中の文庫本がサツと引き抜かれた。一瞬何が起きたか分からぬまま、頭上に消えた本を目で追いかける。

見るとそこにはいつもの黒い帽子を被った学友の、鬼のような顔が浮かんでいた。

「あれ……蓮、子……?」

「ほんつと、メリーってば読書に夢中になると周りが見えなくなるんだから。何度呼びかけても全然反応しないんだもん」

その言葉で私はハツと我に返る。

ここが大学キャンパス内のカフェだということ。

今が二限を終えた昼休みだったこと。

……思い出した。

私は今まさにランチの待ち合わせをしている最中だったのだ。

「あつ、その……ごめんね。ちよつと時間が空いたからつい……」

申し訳なく謝ると、ふんすと荒い鼻息を吹いていた蓮子は、組んでいた腕を解いて本を返してくれた。借り物なので、もうちよつとばかり丁寧はるばるに扱って欲しい。

「ついじゃないわよもう……ああ、せつかくこうして遠路遙々訪ねて来たというのに。酷いわメリーさんったら」

わざとらしく言う蓮子から受け取った本をトートバッグに押し込む一方で、私は空になったカップをテーブルの端に避けつつ言い返す。

「遠路つて……大げさねえ。そもそもここを待ち合わせ場所に指定してきたのは蓮子の方じゃない」

そう。今私たちのいる構内カフェテリア『サテライト』は、文系と理系の校舎を繋ぐ渡り廊下の一角に位置している。

今の時間帯このキャンパスにおいて、人口密度ナンバーワンスポットと言っても過言ではないだろう。

「……で？ レポートの方は無事提出できたの？」

『実験レポート出し忘れた。ゴメン。席取つといて!』

そうモバイルにLINKがあつたのは、今から一五分ほど前。

スタン普も絵文字もない素っ気ない文章から、「あっ、これは結構ヤバめのやつ」と察した私は、かれこれ三〇分近くも席を確保しながら蓮子を待っていたのだ。

そりゃ暇を持て余して本の一冊くらい読みたくもなるだろう。

「ええ、ギリギリ打刻前セーフ! 出しちゃえば後はもうこつちのものよ」

ニカツとチェシヤ猫みたいに笑いながらVサインを決める。帽子の下から覗かせた額はうつつら汗ばんでいた。

宇佐見蓮子<sup>うさみれんこ</sup>。毎度毎度、計ったかのように数分は遅れてくる遅刻の常習犯だ。

聞いた言い訳の数は星新一のショートショートにも匹敵するだろうか。毎度のことながらよくもまあ思いつくものだ。ある意味これも才能と呼んでいいのかもしれない。

「なんか今人のこと悪く思ったでしょ?」

「んーんーべつつにー」

それでいてものすごく勘が鋭い。

基本的に悪いヤツではないのだが、毎回待たされるこちらに少しくらい配慮してもんを覚えてもらいたい。

もつともそんな蓮子の遅刻ありきで、普段より一冊多めに文庫本を持ち歩いている私も、それはそれでどうかとは思<sup>文</sup>うのだけれど。

「でもいいよねえ。そ<sup>文</sup>つちは亀<sup>系</sup>みたいのにーんびりしてて。だいたい必修科目が多すぎるのよこ<sup>理</sup>つちは。それでいて取得単位は同じなんだからずるいと思う」

「亀<sup>理</sup>つて……結構な言い草ね。でも私が亀ならそ<sup>系</sup>つちは兎だと思<sup>理</sup>うわ。もう少し落ち着いて行動するべきなのよ」

もうすぐ春休みを迎える今の学期末ほど、学部の忙しさの差が顕<sup>けん</sup>著<sup>ちよ</sup>な時期はない。入学してはや一年、噂には聞いていたが今まさにそれを実感している。

「もつとも、持つべき時計は懐中時計じゃなくて目覚まし時計かしら？」

先ほどのチェシヤ猫繋がりで今度は白ウサギを連想する。

だがそんな私の精一杯の皮肉にも蓮子は眉一つ動かさず、あつけらかなと言<sup>理</sup>つてのける。

「あら？ メリーはどちらかという<sup>理</sup>と羊だと思<sup>理</sup>うけど」

「メリーさんの羊……ってこれまた安直<sup>理</sup>ねえ」

「いや本食い羊」

思<sup>理</sup>わず私が腕を振り上げたところで、予鈴を知らせるチャイムが鳴った。



「——で、メリーの午後のご予定は？」

「特に。もうテストも終わったことだしね」

学期末ともなると、文系は講義自体が消化試合のようなもので、テストも参考文献を持ち込んで書き写せるという驚きのイージーモードだ。

「理系のみんなが聞いたらブツ飛ぶわね。そもそも未だに紙媒体のテストがあること自体驚きだけど」

一方理系はパソコンを使った試験が主流らしい。

それならレポートの提出もメールでよいのでは？　と思うのだが、それだとしてもサーバの不具合や提出時刻の改ざんといった問題に対処しきれないようだ。機械音痴の私が聞いてもどうせ理解には至るまい。

「あら。それは本好きの私への挑戦？　紙には紙の良さつてもものがあるのよ。手触りといひ匂いといい、デジタルじゃ再現できない良さがね」

続きが気になって一ページ一ページそわそわしながらめくるのが実本の醍醐味だ。画面のスライドではあまりに味気ない。

「メリーってば確かシラバスもわざわざ書籍版を買ってたでしょ？　値段だって重さだっ

て電子版の倍は違うのに」

「ページをめくる時の幸福は何にも代え難いのよ」

「シラバスでも？」

「シラバスでもよ」

例え百冊の本を持ち歩けようと、重さがたった文庫本一冊分になると、私はこれからも紙の本を選び続ける。書店で気になった本を手にパラパラ斜め読み出来るのは、実本ならではの楽しみ方だからだ。

そんなこんなで今日もただ書き写すだけの簡単なテストをさっさと終わらせ、後は優雅な読書タイムと洒落込んだのだった。

「そつち理系こそ大変そうじゃない。ここ数日の慌ただしい蓮子を見てみると少し気の毒に思うわ」

「出た。余裕ある者の上から発言」

「あら、それはお互い様でしょうに」

慌ただしいのは蓮子だけなのかもしれないが、なにぶん理系の知り合いが蓮子オンリーの私には判断基準も彼女に委ねられる。

こうした私の理系に対する偏見も大半は蓮子のせい、ということにしておこう。

「ちなみに私は後でもう一度レポート出しに行ったら終わり。提出が今日の三時までだか



ら今度こそ忘れないようにしなきゃ」

「せっかく内容は素晴らしいのに、蓮子の遅刻癖といい忘れっぽさといい本当残念よね。手にでも書いておけばいいのかしら？」

「それまたずいぶんアナクロな方法ね。んーでも案外手堅いのかな？ ってメリーって私の研究レポート読んだことあったっけ？」

その問いに私は首を横に振る。

「いつも自分でそう言ってるじゃない。私のレポートはプランクに通ずるものがあるって」この子はよく物理学者の名を挙げては自らを例えることがある。ドイツ、ミュンヘンの物理学者、マックス・プランクもその犠牲者の一人だ。

「そうだったけ？ まあいいや、あーお腹すいたー」

そう笑った後、テーブルにぐだーっと突っ伏した。あらかじめカップを避けておいて正解だった。

少なくとも日本史を専攻していた私にとって、プランクがどういう生涯を送り、どんな功績を世に残したかはよく知らない。名前は知っていても、歴史の授業以上の知識は持ち合わせていないからだ。

けれどこれだけは自信を持って言える。

少なくともドイツの天才科学者はいきなりテーブルにうつ伏せで倒れ込んだりはしない

と。天才と変人は紙一重とはよく言ったものだが、元より自由奔放な気質なのだ、蓮子は。そう。まるで近所の野良猫みたいに。

蓮子と知り合ってもうじき一年。私もだいぶこの子の行動心理を掴めてきたようだ。

「ほらほらはしたくないわよ、って蓮子って朝ご飯は食べない派だったっけ？」

「いや、食べたわよ。ハムエッグとトースト二枚」

そのままの体勢でむくりと顔だけ上げて答える。

「それだけ食べてどうしてもうお腹がすくのよ」

私はと言えば朝はコーンフレークとヨーグルト程度で済ませてしまう。片道三〇分ほどの通学時間なので取り分け時間がないわけでもないが、朝からがつつりは胃が受け付けないのだ。

「常に脳を使ってる人間はそれだけ燃費も悪いのよ。難儀なものねえ」

「それじゃあ私はまるで頭を使っていない人間みたいじゃない」

「ごめんごめん。別にメリーのことを言ったわけじゃないってば。ささ、それよりも何にする？」

蓮子がメニューを広げて見せてきた。カフェらしく、軽めのサンドイッチからパスタにカレールイス、オムライスといった洋食メニューが並んでいる。

学校側の補助金で建てられた場所だけあって低価格なのは去ることながら、味もそこ

らのレストランに負けていないのもまた驚きと人気の理由だろう。

特に私一押しなのが、デザートメニューに載っている苺のケーキパフェ、その名も『ふわふわ苺クリームパフェ』だ。

しかもなんと今年に入ってから『ふわふわ苺クリームパフェ・オーレウス』へと進化を遂げたのだ。

しっとりスポンジケーキの間だけではなく生地自体にも苺の風味が加わり、酸味の程よく効いた苺クリームは（当社比？）倍増。サンドされた苺も心持ち大きくなっているように思える。

そして最大の目玉はなんとといっても頂点を彩る苺が二つになったことだ。わずかに五〇円ほどお値段も進化したものの、こいつのためだけに週二から週三へ足を運ぶ頻度を増やすのもやぶさかではない。

なので絶対デザートにはこのパフェを食べてやる。別に甘いものが脳にいいからではない。断じて違う。

「あの、メリー？　なんかすごい勢いでメニュー見入ってるけど決まった？　店員さん呼ぶよー？　メリーさん？」

結局私は軽めにホットサンドを、蓮子はナポリタンをそれぞれ注文した。